



人体のバランスをとる基底顆粒細胞

食べ物は口に入ると唾液の中の酵素でまず消化され、さらに胃、十二指腸、小腸、大腸でそれぞれ出す消化酵素によって少しずつ分解され、吸収される。その際に、消化管を食物が通過している情報はどこが受けているのか？舌では「味蕾」という細胞がそれを行っている。では、消化管の中ではいったいどこなのか？味蕾の細胞は、細胞の先端にブラシのような微細の毛の冠を持ち、細胞の底には、人体のバランスをとるホルモンを含んだ顆粒をもつ。この細胞が基底顆粒細胞なのだ。この先端の毛こそが、外部からの様々な情報を細胞に伝えるアンテナの役割を果たすらしい。で、その情報をもとに発せられたホルモンが、人体全体を整える。

この基底顆粒細胞は、舌に限らず体のあちこちに存在する。肺のそれは炭酸ガスの濃度を測定するし、この細胞は皮膚の下にも存在する。腸にもある。皮膚の基底顆粒細胞でいえば、好きな人に触られれば「快」のホルモンを分泌する。喜怒哀楽など人間の感情に関するホルモンを出すのが基底顆粒細胞だ。

例えば、脳下垂体から出るホルモンの障害で起こるとされていた不妊症について、同じホルモンが腸の基底顆粒細胞からも出ていて、そこを整えれば不妊症も改善しうる。

脳に存在するホルモンが皆、腸の基底顆粒細胞から放出されるのが明らかになっていて、逆に腸のホルモンで、脳で発見された例もでている。

脳からの指令は神経で伝わる。これは電話で言えば有線。腸の基底顆粒細胞からはホルモンで伝わる。これは携帯電話の電波。腹を診て、基底顆粒細胞の働きを活発にすれば、治る病気はいっぱいある。

「ハングリー精神」という言葉が浮かんでくる。「腸の基底顆粒細胞が空腹状態の時こそ、人は貪欲になる」

「武士の切腹は、なぜ腹を切るか」。切腹は、死刑ではない。己が身の潔白を示すために、また腹を切ることで、体ではなく、己の中にある「心や魂」が真っ白であることを証明するためだ。武士にとっての切腹は決して不名誉なことではない。「昔の武士たちは、本能的に知っていた。腹にこそ心があるのを」。

「腹が立つ」「腹が太い」「腹が黒い」「腹の虫がおさまらない」「腹を探る」「腹が煮えくり返る」「腹をくくる」「腹の底から笑う」「腹にすえかねる」「腹を割る」「腹に一物」などなど。すべてが「腹」が「心」につながっているのを表している。腹の根幹は腸。こうした言葉が長く使われてきたのも、人が自然のうちに「心は腸にあり」を気付いていたからだ。

「三つ子の魂百まで」の意味

3歳までに授乳の仕方、離乳の食の与え方などが腸の中身を決め、その人のその後的人格や心の持ち方にまで影響を与えるのだ。母親がうつ状態、イライラ状態など、精神や肉体面が不安定な場面で授乳したり、冷たい食べ物や動物性たんぱくを与えたりするのは、避けなくてははいけない。なぜなら腸内細菌が出来上がる前に、大人用のたんぱく質を与えると、それがまだちゃんと消化されずにそのまま吸収されて、やがて体内に、それに対する抗体が出来てアレルギーなどに原因となるためだ。ことに生エビ、刺身、ソバなどは注意したほうがいいし、この抗体はアトピーや喘息の原因にもなりうるという。もっと困るのは防腐剤や抗生物質で、まだ体が未発達な時期に腸に入ると、せっかくの腸内細菌が死んでしまう。

まだ1,2歳だが、アトピーや自閉症の症状がでている子供。そこで、子供の方ではなく、母親の方の腹診を試みる。で、腸内のバランスが崩れているのがわかり、そちらを整えてみる。すると、子どもの方の症状も1か月もしないうちに収まってしまった。治った原因は特定できない。母親の心と体が安定して、子供にまで良い影響がいったのか、授乳がスムーズになったせいなのか。よく、小さいころに虐待を受けた人間は比較的に犯罪を起こしやすく、自殺率も高いといわれている。3歳になるまでのところで、腸のバランスを、後では取り返しがつかないくらいに壊したのが原因であろう。

人間の根っこは腸にあり、心さえも腸にある、と考える医療は、正直いって、現代医学の常識からはかけ離れている。